

泰日国際家族における親の「教育戦略」の特徴とその影響要因の解明

Characteristics of parents' "educational strategies" and factors affecting them among Thai-Japanese families

柴山 真琴¹, ビアルケ(當山) 千咲², タマヌーン ラスメーマスマン³, 矢野 博之⁴
Makoto Shibayama¹, Chisaki Toyama-Bialke², Thamnoon Rasmeeemasuang³, and Hiroshi Yano⁴

¹大妻女子大学家政学部, ²東京経済大学全学共通教育センター, ³ブラパー大学工学部,
⁴大妻女子大学家政学部

キーワード：泰日国際家族, 教育戦略, 複数言語実践

Key words : Thai-Japanese international family, Strategy for child's education, Multi-language practice

1. 研究目的

国際結婚の増加は、1980年代以降に加速したグローバル化(地球の縮小化)に伴って生じた社会現象の1つである。国際結婚夫婦に子どもが生まれると、子どもの言語と教育の選択が重要な問題となる。とりわけ子どもの学校選択は、学習期間の長さ、現在および将来の生活と学習への影響の大きさ、経済的負担などの点で、国際家族の教育実践の中で最も重要な選択と考えられる。

父親の母国居住の日系国際家族を見ると、多くの親達は現地式教育か日本式教育かの二者択一ではなく、子どもがバイリテラルになることを目指して二言語教育実践を行っているが^{[1][2]}, 子どもの複数言語習得に向けてどのような教育空間を形成するかは親の「教育戦略」に大きく依存する。ここでは、親の「教育戦略」を「親の複数言語教育観, 家庭内の資源(親が持つ教育資源や言語能力)の活用と子どもへの伝達の仕方, 子どもの通学校の決定を含む親の一連の選択過程」と捉える。

本研究では、これまでほとんど研究の蓄積がない泰日国際家族^{(注1)(注2)}に注目し、親の教育戦略とそれに影響を与える要因を具体的に明らかにすることを目的とした。

2. 研究実施内容

(1) 本研究の枠組み

本研究では、国際家族の言語選択に関する従来の研究知見^[3]に「教育戦略」の視点を組み込んで、研究枠組み(図1参照)を構成した。本研究では、この枠組みに基づいて、調査と分析を行った。

また、データ分析においては、「解釈的アプローチによる質的分析法」^[4]を採用した。

(2) 調査の概要

1) 対象家族

本研究では、親の母語条件を一定にするために、タイ人父親+日本人母親の国際結婚家族(泰日国際家族)に絞り、異なる学校選択をした5家族を

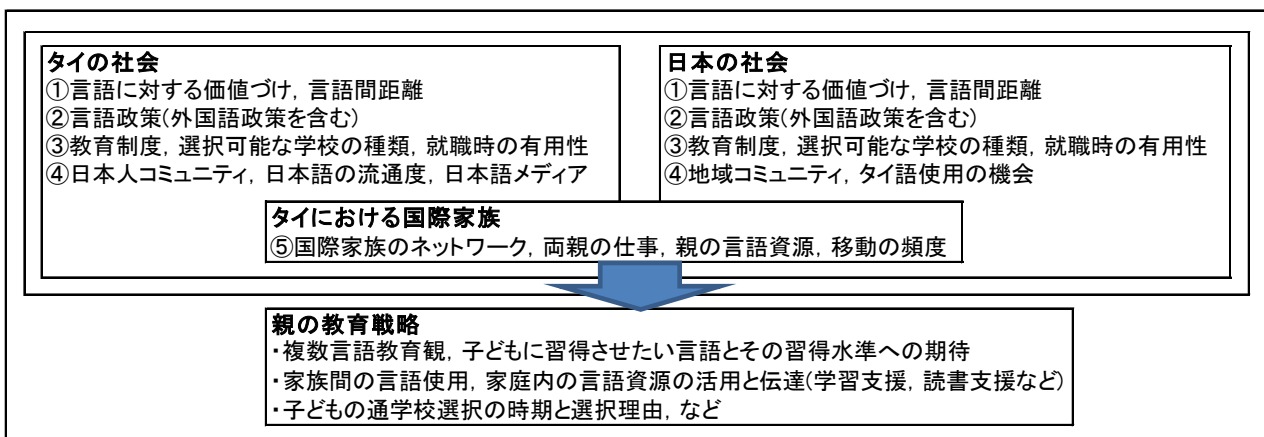


図1 本研究の枠組み

対象家族として選定した(表1参照)。対象家族は、首都バンコクの南西に位置するO県に居住していた(但しD・E家族の母子は日本居住)。

表1 対象家族の概要

家族	インタビュー対象者	子どもの通学校	子どもの学年
A	母親	現地校(バイリンガルプログラム)	小4 小2
B	母親	現地校(マルチリンガルプログラム)	小4
C	母親 (父親)[注1]	現地校(バイリンガルプログラム)	小2 年長 1歳
D	母親	日本人学校 (日本の学校)[注2]	小2 年長
E	母親 父親	日本の学校	小2 年少

[注1]父親は子どもの面倒を見ながら時々インタビューに参加した。[注2]インタビュー実施時は、期間を限定して、子どもを日本の小学校に通わせていた。

2)調査の方法

本調査では、「インタビュー調査」と「フィールド調査」を実施した。その概要は、以下の通りである。

①インタビュー調査

図1の研究枠組みに即して、事前にインタビュー項目を構成した。特に親の複数言語教育観、子どもに習得させたい言語とその習得水準への期待、家族間の言語使用と家庭内の言語資源の活用と伝達、子どもの通学校選択の時期と選択理由、に焦点を当てた。インタビュー調査は、2019年6月から9月の間に、日本国内およびタイにおいて実施した。E家族の父親のみ第二著者が英語で個別にインタビューを行ったが、それ以外は第一著者(研究代表者)がすべて日本語で行った。

②フィールド調査

家族の解釈をより深く理解するために、2019年9月に、対象家族の居住地域や子ども達の通学校でフィールドワークも行った。

(3)主な調査結果

対象家族の教育戦略の特徴と、それに影響を与えていると考えられる要因について、以下の結果が得られた。

1) 泰日国際家族の教育戦略の特徴

対象家族の教育戦略の特徴は、次の3点にまとめることができる。第1点は、対象家族の親達は、

子どもの誕生前後から大学教育までを見据えた長期的な展望の中で、子どもの小学校選択をしていたことである。タイ居住家族の場合、現地校か日本人学校かの選択を念頭に置きながら、①子どもの誕生前後からのバイリンガル教育に関する情報の収集、②情報収集を踏まえた上での親子間での言語使用の決定、③小学校に先立つ就学前教育の選択、という3種類の事前準備をしていた。現地校選択者のうち、地元でも評判の高い大学付属小学校を選んだ家族は、④小学校入学準備もしていた。さらに子どもの小学校入学後は、大学進学までの道筋をイメージしながら、子どもの学習支援や読書支援などを行っていた。一方、日本人学校選択者の場合、同小学部に入学後に日本の小学校に通わせることで、日本式教育の補完もしていた。

第2点は、すべての対象家族が両親の母語(タイ語・日本語)と英語の三言語の習得を子どもに期待していたことである。三言語の優先順位は、子どもの通学校とほぼ対応しており、現地校選択者はタイ語を、日本式教育(日本人学校・日本の学校)の選択者は日本語を子どもに習得してもらいたい最優先言語として位置づけていた。学校言語以外の二言語の順位については、現地校選択者ほど英語よりも日本語を優先し、日本式教育の選択者ほどタイ語よりも英語を優先する傾向が見られた。

第3点は、タイ現地校に子どもを通わせている家族では、複数言語に対して、多様な手段を駆使した支援を行っていることである。一貫してタイに住み、<タイ語=学校言語、日本語=継承語、英語=教授言語/教科の1つ>として子どもが三言語を同時習得している家族に注目すると、タイ語支援については、幼少期からの父子間でのタイ語使用と読み聞かせ、読書支援、宿題支援、タイ語話者との交流がなされていた。日本語支援については、幼少期からの母子間での日本語使用と読み聞かせ、読書支援、通信教育の利用、日本のテレビ番組の視聴、日本語話者との交友、日本への一時帰国がなされていた。英語については、宿題支援と塾・補習教育の利用がなされていた。

特にタイ居住家族の継承語(日本語)教育については、子どもが継承語としての日本語の力(会話力と読み書き力)を習得できるよう、幼少期から多様な手段を用いて継続的な家庭学習を構成していることが明らかになった。

2) 泰日国際家族の教育戦略に影響を与える要因

上述した対象家族の教育戦略の特徴には、「タイの学校教育における外国語教育強化策」と「居住地域の特殊性」が影響を与えていると考えられた。

前者については、小学校段階からの英語教育の必修化は、グローバル化に伴う英語需要の高まりに呼応した動きとして、タイに限らずドイツでも見られる現象である。しかし、英語強化のためのプログラムの多様さと実施校の広がりという点に、タイならではの特徴があると考えられた。他方で、特定の小学校であっても、小4から第二外国語として日本語を系統的に学習できるのは、タイ社会における日本語重視の姿勢が大きく影響していると考えられた。

後者については、日本語補習授業校(以下、補習校)が未設置のため、子どもの日本語(継承語)教育は家庭での自助努力に任されていたが、対象家族の居住地域における日系企業のプレゼンスの大きさと日本語に対する評価の高さが、対象家族の日本語教育実践に肯定的な影響を与えていると考えられた。

3. まとめと今後の課題

以上から、泰日国際家族の教育戦略に「タイの学校教育における外国語教育強化策」と「居住地域の特殊性」が影響する過程を次のようにまとめることができよう。＜対象家族の親達は、タイ社会における日本語と英語の有用性を視野に入れつつ、就園前の時点で子どもの習得言語と通学校を一对にした選択をしている。特に現地校を選択したタイ居住家族の場合、補習校を利用できず親が個別に継承語(日本語)教育実践を行っているが、地域社会における日系企業のプレゼンスが大きく日本語能力が肯定的に評価されるという社会的文脈と、現地校で日本語を系統的・継続的に学習できるという制度的文脈が、家族の継承語教育実践を動機づけ下支えしている。＞

今後の課題としては、対象家族数を増やすことと泰日国際家族のタイ国内比較を行うことが挙げられる。子どもの通学校ごとに数家族を選んでインタビューを行うことができれば、泰日国際家族の教育戦略の特徴をより明瞭な形で取り出せると予想される。さらに首都バンコク在住の泰日国際家族にもインタビューを実施できれば、居住地域による学校の選択肢の違いや継承語教育機関の有無が親の教育戦略にどのような影響を及ぼすのか、

比較検討も可能になると思われる。

4. この助成による発表論文等

① 雑誌論文

- [1] 柴山真琴, ビアルケ(當山)千咲, タマヌーン・ラスメーマスマアン, 矢野博之. (2020) 泰日国際家族における親の「教育戦略」の特徴とその影響要因. 人間生活文化研究, 30.

注

- 1) 志水ほか(2013)^[5]では、日本居住の国際家族を中心に親の教育戦略が検討されている。海外居住の国際家族は瑞日国際家族のみで、泰日国際家族は取り上げられていない。
- 2) タイ・バンコク居住の国際家族の教育観を検討した研究として渡辺・久保(2018)^[6]があるが、教育戦略という観点からの分析はなされていない。

引用文献

- [1] 柴山真琴ほか. (2016) 子どもの言語習得とグローバル化時代のインターフェース：海外居住の国際家族におけるバイリテラシー実践を手がかりに. 発達心理学研究, 27, 357-367.
- [2] 柴山真琴ほか. (2019) 現地校・補習校の宿題支援における家族間の調整過程：独日国際家族の事例に基づいて. 人間生活文化研究, 29, 236-256.
- [3] 山本雅代. (2007) 複数の言語と文化が交差するところ：「異言語間家族」への一考察. 異文化間教育, 26, 2-13.
- [4] 柴山真琴. (2001) 行為と発話形成のエスノグラフィ：留学生家族の子どもは保育園でどう育つのか. 東京大学出版会.
- [5] 志水宏吉ほか. (2013) 「往還する人々」の教育戦略：グローバル社会を生きる家族と公教育の課題. 明石書店.
- [6] 渡辺幸倫・久保康彦. (2018) タイ王国における日タイ国際結婚家庭の教育観：教育商品調達についての語りから. 相模女子大学紀要, 81, 1-18.